

20151021 「聖書 66 巻の主題はイエス・キリストである。」

マラナサ・グレース・フェロシッポ 菊地 一徳氏

では、今日は「聖書 66 巻の主題はイエス・キリストである。」というタイトルで主題説教を皆さんと共に分かち合っていきたいと思います。早速聖書の箇所を開いて頂くこととなりますが、聖書 66 巻すべて開きます。66 回は最低開きますけれども、恐らく数えてないですが、今日は皆さんとは 100 箇所位は余裕で開くことになると思いますので、是非ついてきて頂いて、ついてこれなくても心配はありません。しっかりと聞いて頂いて、『**信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。**』（ローマ 10 : 17）と、そのことも是非、又聞くということも重視して頂いて、今日の時間を過ごしていきたいと思います。

では、ルカ 24 : 27 から序論ということでお聞き頂きたいと思います。『**それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。**』復活のイエス・キリストがエマオの途上で二人の無名の弟子と歩かれています。歩きながらのバイブルスタディーが行なわれています。約 11 キロの道のりを今来ているところで、道すがら『**モーセおよび**（モーセというのは“モーセ五書”です。）**すべての預言者から始めて、聖書全体の中で**（これは新約聖書がまだ完成していませんので、特に旧約聖書全体の中で）、**ご自分について書いてある事がらを彼らに解き明かされた。**』と。旧約聖書の中にイエス・キリストの事が書いてあります。イエス・キリストは新約聖書になって始めて登場するお方じゃないということです。旧約聖書の時代から、既に創世記の段階からイエス・キリストはご自身を現しておられます。ナザレのイエスとしてこの世に来られたのは今から二千年前ですが、創世記は今から三千五百年前ほどに書かれていることです。そこにもう受肉前のキリストは存在されているということが記録されています。

また、同じくルカ 24 : 44 に『**さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」**』ここでも同じことが繰り返されています。“モーセの律法と預言者と詩篇”、これが聖書全体のことです。

参考までに、自由主義神学の立場の人たちは、『**モーセ五書**』というものを認めておりません。それは『**創世記**』『**出エジプト記**』『**レビ記**』『**民数記**』『**申命記**』の五書は、これはモーセが編纂したのではない。モーセが書いたのではないと。彼らは聖書を文字通り信じない人たちで、聖書のすべてが神の靈感によって書かれたということを感じていない人たちです。奇跡だとか、超自然的なことは、ほとんど信じていません。イエス・キリストの復活すら否定する人たちもあります。そういう人たちは、モーセが『**モーセ五書**』を書いたということは有り得ないことだと。これはもう大分後代になってから、たとえばエズラの時代かなんかに書かれて、まとめられたものだと。非常に合理主義で人間的な尺度から聖書を捉えて、彼ら曰く「自分たちがイエス・キリスト以上に聖書を知っているんだ。」と。イエスは“モーセ”と言ってるんです。でも、彼らは「いや、モーセが書いたんじゃない。」と言うわけです。イエス・キリストを最早^{もはや}信じている人たちとは言えないということです。ですから、これはきつく聞こえるかもしれませんが、自由主義神学の人たちは、イエス・キリストすら信じていない人たちです。それがこの日本のプロテスタントの主流を占めている立場だということも、皆さんの心に留めておいて下さい。昨日、丁度クリスチャンデータブックというのが、2015 年版が出たんですけれども、そこに日本のプロテスタント人口について書かれている教勢データというのが載っていました。それによると人口の 0.4%位がプロテスタント教会のメンバーであると。およそ八千位のプロテスタント教会があるんです。ただ、それは名簿上の会員も含めての数

です。礼拝者数というのもありまして、それで概算すると大体 31 万人位が日本全体の礼拝者数です。非常に少ないと言って良いと思います。長野市の人口以下です。で、その礼拝者数の中にも全員が全員ポー・アゲーン・クリスチャンと呼ばれる真のクリスチャンとは言えないわけです。その中には、多分半分以上は、自由主義神学の人たちがあるわけです。で、もちろんノンクリスチャンでありながら、クリスチャンのふりをして、仮面を被って礼拝にきっちり集っている人たちも含めての数です。これはちょっと余談になりましたけれども、イエス・キリストはハッキリと「**モーセ五書はモーセが書いたんだ。**」ということをして信じて述べております。イエス・キリストを信じないで、自分たちの学識を信じる。自由主義神学の人たちの見解をイエス以上に重んじるというのは、大問題だということをご自分で一つ、ちょっと話さずれましたけれども、皆さんの心には留めておいて頂きたいと思います。

で、ヨハネの福音書 5 : 39 を次に見て下さい。『あなたがたは、聖書の中（これも勿論新約聖書が完成していないので、旧約聖書を特に指しています。旧約聖書の中）に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。』旧約聖書はイエス・キリストについて証言している証言集と言っても差し支えありません。

そして、同じくヨハネの福音書 5 : 46 に『もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずですよ。モーセが書いたのはわたしのことだからです。』ハッキリとイエス・キリストは「モーセが書いたのは。創世記にも、出エジプト記にも、レビ記にも、民数記にも、申命記にも、全部わたしのことが書いてある。」と。で、「それを全部書いたのはモーセだ。」と、イエス・キリストご自身がそう主張されているわけです。皆さんは聖書に最初に取り組んだ時、どのような意図で、どのような目的で読まれたかは、それぞれ違うと思います。そこに何かを求めて大体読み始めたと思いますが、聖書の正しい読み方はイエス・キリストを知るために読むという読み方です。それ以外の読み方はすべての外れです。「今悩みを抱えているので、聖書に何か答えがないだろうか。丁度いい自分にピッタリ合った言葉はないだろうか。」といったような読み方をしてしまうと思うんですが、そうではなくて、聖書というのはすべてイエス・キリストに関する内容で、イエスを知るための内容となっていますので、イエス・キリストを知るために読まなければ、聖書は読めたくちには入らない、“聖書読みの聖書知らず”ということになってしまいます。逆に、もしあなたが聖書を通してイエス・キリストを知ることが出来るならば、もうそれですべて事足りるということです。なぜならば、イエス・キリストがすべての悩みの答えだからです。すべての問題の答えだからです。あなたが欲するすべてがイエス・キリストの中に見いだせるからです。あのために、このために、いろいろ皆さんのテーマを聖書の中に見出そうとするかもしれません。でも、実はイエス・キリストは私たちの究極の救い主であり、解決者であって、何でもイエスに尋ねれば答えが出るのであります。そして、勿論イエス・キリストは知識を教えるだけじゃなくて、イエスには力があるわけです。ですから、どんな問題も解決できる力のあるお方です。解決策は専門家にも尋ねることが出来るでしょうし、いろんな人に相談して、それなりの方策というものを教えてもらうことは出来るかもしれません。でも、それが実際に出来るかどうか。それは別の問題であります。イエス・キリストはすべての答えをお持ちであるだけじゃなくて、すべての答えをそのままそっくり実現できる方であるということも忘れないで欲しいと思います。そんなイエス・キリストを知ることができるのが、この聖書という神の靈感によって書かれた啓示の言葉であります。

で、今度はヘブル人への手紙 10 : 5~7 を開いて下さい。『⁵ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。（キリストが受肉してこの世界に来て、二千年前のクリスマスにこの世界に来てこう言われた。イエス・キリストが最初に発せられた言葉と言って良いかもしれません。）「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造って下さいました。（処女マリヤの胎を借りてキリストはこの世に産まれ出て下さいました。）⁶あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足

されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』これは詩篇 40:6~8 の引用ともなっています。これはイエス・キリストについて書かれている預言の詩篇で、メシヤ詩篇と呼ばれるものです。そこをイエスは引用して、この世界に来てご自身のことを言われたんです。“聖書のある巻に”、聖書は元々巻物であります。今は一冊の書物になってますが、本来は旧約聖書は 39 の巻物、新約聖書は 27 の巻物ということで、全部で 66 巻ということになります。で、その中にイエスについて書かれていると言っているわけです。

で、今度は使徒の働き 28:23。『そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。(パウロは朝から晩まで語り続けたとあります。私の模範です。) 神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。』これが初代教会時代の説教者の教え方です。彼らは旧約聖書を使ってイエス・キリストについて証したわけです。これが聖書教師の教授法というものです。モーセの律法。パウロも『モーセ五書』はモーセの作だと認めています。“モーセの律法と預言者たちの書によって”これは旧約聖書を指す慣用語です。旧約聖書によってイエスのことについて、彼らを説得しようとしたと。このことから皆さんは、旧約聖書のテーマはイエス・キリストであるということは、確信できたと思います。

で、新約聖書に関しては言うまでもないですね。特に福音書は、イエスについて書かれている内容そのままです。イエスの言行録と言って良いと思います。で、続く『使徒の働き』もイエスの言行録の続編であります。イエスのご自分と同じもう一人の助け主を送られて、それは“聖霊”と呼ばれる方で、その“聖霊”が教会を通して、クリスチャンを通して、働かれた。つまりキリストの御霊が教会を通して働かれたその言行録・歴史書が『使徒の働き』です。で、後はパウロの書簡とか、あるいはペテロの書簡とか、ヨハネの書簡とか、あるいは『ヨハネの黙示録』。黙示録も『ヨハネの黙示録』と言っていますが、実際には黙示録を読んで頂くと分かりますが、そこにはハッキリと“イエス・キリストの黙示”と書いてあります。それはヨハネが記録しただけで、実際には“イエス・キリストの黙示”というのが、聖書最後の書物であります。ですから、新約聖書に関しては言うまでもなく、これはもう自明と言って良いと思います。周知の事実。それはイエス・キリストに関する内容であると。

ただ旧約聖書は、ちょっと分かりづらい内容もありますし、イエス・キリストについて書かれているとは到底思えないような内容も見受けられると思ってしまって、古い内容でもあって、あまり歓迎されなかったり、敬遠されてしまうこともあると思います。あるいはただの物語として、昔話のようにして読まれてしまう傾向もありますが、でも今の箇所を見てお分かりの通り、旧約聖書はすべてイエス・キリストについて書かれている内容で、イエス・キリストの証言集そのものであります。ですからそのようにして旧約聖書を読まない限りは、読んだ内にも入りませんし、正しくは理解出来ないということです。イエス・キリストを知るといふ目的以外で、これまで旧約聖書を読んできたり、学んできた人は、全く無駄だったと言ってもいいくらいです。今日からは読み方を正して頂いて、まともに読んで頂きたいと思います。それが、新約聖書の時代のクリスチャンたちの旧約聖書の読み方であったということです。で、そのように読むと、彼らのようになれるんです。使徒の時代の教会、エネルギッシュでした。勢いづいていました。ライブリー”lively”でした。エナジーティック”energetic”でした。物凄いパワーを感じますね。現代の教会とは似ても似つかないと。まあ、そのような初代教会、あるいは原始教会の姿に私たちは憧れを覚えるわけです。そんなふうになれば、どんなに素晴らしいだろうか。であれば、彼らに近づく努力をしなければいけません。私たちは彼らと全く異なるような歩みをしているならば、少なくとも彼らに近づくような歩みをしなければいけません。その歩みの中の 하나가、聖書の読み方です。勿論彼らは聖霊によって主導されていました。現代はどうかというと、組織力に主導されているような教会です。人間の知恵とか知識。

現代は正に情報化社会で、いろんな知識に溢れています。科学技術というものが正に幅を利かせて、科学万能の時代になって、何でも解明できる。何でも科学の力で。でも二千年前はそうじゃなかったです。二千年前は何もなかったわけです。コンピューターもありません。ネットもないです。スマホなんかないわけです。何か知りたければグーグルで、じゃないです。何か知りたければ、聖霊に依り頼んで、聖霊によって答えを頂く。すぐ祈ったんです。すぐに専門家に頼ることをしませんでした。実は彼らは印字された聖書すら持っていませんでした。今私たちは一人ひとり個別に自分の、私用の聖書を持っています。家に何冊もあるという人もあると思います。私も数十冊持っていますが、二千年前の人たちはそのように聖書を、自分のものを持っていませんでした。ですから、常に御言葉が説かれる時には、聞き流すなんてことは出来ません。後で聖書を開いて確認するという事もないわけです。ですから、一生懸命聴いて、そして聖書を持っている人のところにいつも集まっていたわけです。で、もちろん写本によって聖書が普及して行くんですけども、常に神と繋がって、常に神に聞くという、そういう信仰姿勢を彼らは持っていました。で、そのことを教会に集まって、書かれた言葉を通して確認するという作業のようなことを毎回彼らは教会の集会の中でしていたわけです。そういう初代教会の姿も今少し心に留めながら、彼らがどのように旧約聖書の中からイエス・キリストについて知っていったのかということも考えて頂きたいと思います。

で、もう少しだけちょっと序論の中でお話したいことがあります、今から皆さんにお話するのはクリスチャンの著名人の名言であります。まず4世紀から5世紀にかけて活躍した教会教父の一人、“教父”というのは“教える父” church father と言います。この人は聖書学者で教会博士というふうには呼ばれる人物でヒエロニムスという人です。そのヒエロニムスの言葉で「**聖書を知らないことは、キリストを知らないことである。**」逆も然りですけども。クリスチャンなのに聖書はほとんど読みませんという人があります。一週間に一回教会に行ったら開くこともあります。日本の多くの教会では日曜日の礼拝に信徒が聖書すら持っていかないという現実があります。勿論教会に聖書は付属品として置いてあるので、まあそれを教会員ならば自由に借りて開くことも出来るわけです。礼拝のプログラムの中では聖書を開くこともあるいはあると。でも、普段から聖書を持ち歩くとか、家でも聖書を事ある度開いて読むとか、毎日毎日定期的に聖書を開いて読むというクリスチャンは、ごくわずかではないということを知って下さい。そういう人たちは、キリストをろくに知らない人たちだと言って差し支えありません。ヒエロニムスの言葉は真理です。「**聖書を知らないことは、キリストを知らないことである。**」なぜならば、聖書はキリストについて書かれている証言集だからです。

今度はマルティン・ルターの言葉も紹介します。宗教改革者ルターの言葉です。「**聖書は、その中にキリストが横たわっている飼葉桶である。母親が赤ん坊を見出すだけの目的で揺りかごに行くように、私たちはキリストを見出すだけの目的で聖書を読むべきだ。**」これも至言です。

で、もう一人やはり宗教改革者ジャン・カルバン。彼もルターと同じようなことを言っています。ルターはドイツの人で、カルバンはフランスの人で晩年はスイスで過ごしました。「**われわれは、聖書を読む時、その中にキリストを見出そうという意図を持って読まなければならない。**」宗教改革者は同じことを言いますね。彼らは聖書の読み方を改革した人たちと言っても差し支えないです。キリストを知るために、聖書を読む。そうしたら宗教改革が起こったわけです。

また18世紀のイギリスのリバイバリストで、ジョージ・ホイットフィールドという人、この人はアメリカに宣教師としても行っているの、世界的に有名な人物です。ジョージ・ホイットフィールドの言葉。「**イエス・キリストは聖書の中に隠れている宝物です。ですから、聖書はイエス・キリストを見つけるために読まなければなりません。**」まるでそれは宝探しのような感じです。特に旧約聖書を読みながら、中々イエス・キリストを見つけることは難しいと思うかもしれません。イエス・キリストが一々載っているわけじゃな

いです。でも、それは正に宝探しのようなものだと。ですから、本当にワクワクするんです。特にカタカナの名前の羅列の中とか、たとえば創世記 5 章のアダムの系図。アダムからモーセまでの十代、それぞれの名前、ヘブル語には意味があります。その名前の意味を知っていくと、そこにはイエス・キリストについて書かれている内容がバッチリ秘められているわけです。あるいはレビ記の中を見て頂くと、レビ記はいろんな生贄の規定であったり、食べて良い物とか、食べてはいけない物とか。何が汚れていて、何がきよいのかとか。あるいは大祭司のいろいろな規定とか、または幕屋の中のいろいろな祭具であったり。いろいろな細かい、私たちとはあまり普段の生活には関係のなさそうな内容がいっぱい書かれているんですけども、でもそれら一つ一つは、実はイエス・キリストについて書かれている内容なんです。で、それを正に宝探しのようにして読むとワクワクしてきます。今までレビ記は“いびき”だったかもしれませんが、全く変わります。もう実にエキサイティングな書物です。

で、今度は日本を代表するクリスチャンで、明治のクリスチャンで、内村鑑三の言葉を紹介します。「**私たちはキリストを知ろうと願って聖書を学ぶのである。私たちはキリストの精神を知り、その霊を受けるために聖書に向かうのである。**」やはり偉大なクリスチャンたちは、同じ姿勢で聖書と取り組んでいます。

また、20 世紀を代表する聖公会、イギリスの方で、福音主義のリーダーと呼ばれた人で、ジョン・ストットという人がいます。もう天に召されましたが、このジョン・ストットという人の言葉も紹介します。

「**聖書はイエス・キリストの肖像画である。**」と。ですから、私たちはイエス・キリストの立体像をこの聖書の中に見るわけです。平面的じゃなくて、肖像画です。ですから、それはもう聖書 66 巻というある種のパズルのようなものです。そのパズルが組み合わさって、最後に出来上がるのがイエス・キリストの肖像画と。パズルのワンピース、ワンピースは不可解に見えて、どうしてこれが繋がるのか、ヘンテコな形だなんて思って中々繋がりを感じなかったり、全体像が浮かび上がってこないの、枝葉末節に目が^{とど}留まってしまって、全然さっぱり何のことか分かりませんということも多いと思うんですが、でも忍耐強く聖書 66 巻すべて読み通して頂くと、確実にイエス・キリストの肖像画が浮かび上がって来るようにデザインされています。まあ、そのことを今から見ていきますので、楽しみにして下さい。

そして、これも日本人の有名なクリスチャンで、戦前戦中に活躍した日本ホーリネス教団の創立者の一人です。中田重治という人とペアを組んで働いた笹尾鉄三郎という人の言葉です。「**創世記の始めから黙示録の終わりまで、聖書を一貫するものはキリストである。**」笹尾鉄三郎という人の言葉です。この人も知る人ぞ知る気骨あるクリスチャンです。アメリカに宣教師としても行っているくらいです。戦前戦中に宣教師としてアメリカに行っているという凄い人です。

このぐらいで大体著名人の名言は、これぐらいにとどめておきたいと思いますが、もう一つだけ紹介させて頂きたいものがあります。それはギデオンの聖書に記されている内容で、すべてのギデオンの配布用の、贈呈用の聖書に載っているわけではないですが、日本国際ギデオン協会が書いている内容で、ギデオンというのは皆さんも知っての通り、世界的な組織です。世界 170 カ国以上で聖書を配布したり、贈呈している、実業人とか専門の職業人といったビジネスマンといった人たちが主に働きを担っているものですが、創立以来 12 億冊を世界中で配布しているという団体です。ホテルとか、旅館とか、病院とか、刑務所とか、そういう所でも皆さん目にしたことがあると思います。勿論この教会にもあるわけですし、また自衛官とか、看護師とか、そういった人たちにも配布されることもあります。警察官にも、そして学校でも校門とかで皆さんも学生の頃受け取ったこともあるかもしれません。で、その聖書の中に、大抵の配布用の聖書に載っていると思うんですが、聖書について説明されている概略みたいなまとまった文が印字されてます。ちょっと長いですがそれでも聞いて下さい。

『聖書には、天地をお造りになった真の神のみこころ、人間の本当の姿、神にそむく者の行きつく所、神の救いの道、神を信じる者のさいわい等が書かれています。聖書の教えは神聖なものであり、その戒め

は、私たちが責任をもって守らなければならないことなのです。聖書に書かれている歴史的な事柄はすべて真実ですし、聖書に定められたことは必ず実現いたします。どうか聖書を読んで知恵ある人となって下さい。（ですから、これは自由主義神学の人には配れない聖書ですね。“聖書に書かれている歴史的な事柄はすべて真実ですし”とありますので、いわゆる福音派の人でなければ、配れない聖書ということです。）聖書に記されていることを信じて、身の安全を図って下さい。聖書の教えを実行して、きよい者になって下さい。それは聖書こそ、あなたの歩む道を導く光であり、足もとを照らすともしびであり、あなたを支える心の糧であって、あなたを慰め励ます書物だからです。聖書はまた旅する人の地図、巡礼する人にとっての杖、パイロットにとっての羅針盤（らしんばん）、クリスチャンにとっての憲章にたとえることができます。聖書のあるところでは地獄への門が閉ざされ、天への道が開かれ、パラダイスが回復するのです。イエス・キリストこそ聖書の大きな主題であります。（と。イエス・キリストこそ聖書の大きな主題であります。その通りです。その続きに）そして聖書が心から望んでいることは、私たち人間が良くなること。そして最終的にはそれによって、創造主なる神が栄光をお受けになることです。聖書のことばを暗記するように心掛けて下さい。そうすると暗記したことばがあなたの心を支配し、あなたの日々の歩みを導くようになります。聖書を読む時はゆっくりと、何回もくりかえして読んで下さい。その時あなたは、聖書こそ無限の富がかくされた宝の山であり、聖書の世界こそ栄光にあふれた天国そのものであり、また喜びが満ちあふれて流れる川であることを発見されるでしょう。聖書に書かれてあることを信じる人には、「永遠の生命（いのち）」が豊かに与えられ、その名前は「生命（いのち）の書」に記されて永遠に覚えられ、また死んでから、すべての人が一度は必ず立たねばならない審判の日に、その人は恐れなく神の前に立つことができます。どうか聖書を読んで、創造主なる神が永遠に与えようとする最善、最良の贈物を自分のものにして下さい。』この“最善、最良の贈り物”とは勿論イエス・キリストのことを言うわけですが。そういう前書きがギデオンの聖書には載っています。最近のものは載っていないかもしれませんが。内容がちよっと支障があると思っている人も少なくないかもしれないので、分かりませんが、いずれにしても『イエス・キリストこそ聖書の大きな主題であります。』というのは、これは確かなことです。この主題以外の副題みたいなものは、大したものではないと。そういった沢山の副題があるように思うかもしれませんが、主題さえしっかり押さえておけば、聖書は正しく読めます。正しく理解できます。でも、この主題を外したら、聖書は正しく理解されずに、むしろ珍紛漢紛ちんぶんかんぶんになってしまったり、あるいは偏った理解になって偏見を生み出したり、そしてその偏見が私的解釈によるそのような御都合主義が、むしろその人のライフスタイルにも暗い影を落とすようになってしまうかもしれません。ですから、聖書を使っているいろいろな異端、カルトも生まれてくるわけです。彼らは私的解釈をしてしまったからです。イエス・キリストを主題として正しく読んでいないからです。そうしている限りは、最終的には聖書を使いながらも間違った教理が生み出され、そしてそれが組織化してくると異端やカルトにまで発展してしまうという危険性も伴っています。聖書そのものは権威ある言葉ですから、その聖書を使っているという話になると、人はそれだけでも信用してしまうということもあるわけです。

で、これから本題に入っていきたいと思いますが、アウグスティヌスがよく引用した言葉で、「**新約聖書は旧約聖書の中に隠されており、旧約聖書は新約聖書の中に表されている。**」という言葉に胸に留めて頂きながら、これから聖書 66 巻を皆さんと一緒に実際に開いていきます。そこにイエス・キリストを見て頂きたいと思いますが、又旧約聖書と新約聖書の繋がりというものも覚えて頂きたいと思います。では、早速今から 66 巻全部開きますので、しっかりとついてきて頂きたいと思います。

では、『創世記』。創世記は 66 巻の中からイエス・キリストについて書かれている内容がいっぱいあるんですけども、ほんの数節だけピックアップします。1 章の中から 1 節分だけとか、そういう形なので、

そんな膨大な量にならないと思いますが、補足する内容も出てきますので、そうした場合は他の箇所も開きながら、新旧約聖書をまず開いて頂きますけれども、その中に新約聖書の内容もあるので、新約聖書と照合しながら進めていくような形にしたいと思います。

創世記 3 : 15。これが皆さんもよく知っている“原福音”と呼ばれる箇所です。Original gospel というところです。福音書の起源がここにあります。『創世記』という書名そのものが、ヘブル語で“ベレシート”と言って、“起源”という意味です。ですから“起源の書”、“オリジンの書”。何かの起源を知りたければ、オリジンを知りたければ、創世記を見ればいいんです。で、福音の始めはどこにあるかといったら、**創世記 3 : 15。**『わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。』“おまえ”というのは、“蛇”です。サタンのことです。その“蛇”、サタンの頭を踏み砕く“女の子孫”。これがイエス・キリストのことを指しています。それが創世記の中のイエス・キリストであります。聖書 66 巻の中に受肉前のキリストが現れているんです。で、最初の書である『創世記』には、“蛇の頭を、サタンの頭を踏み砕く女の子孫”。この“女の子孫”というのは文字通りは“女の種”という言葉です。直訳は“子孫”ではなくて、“種”、しかも“種”は単数形です。英語では seed となっています。で、彼という言葉が代名詞で受けているので、そのことも明らかになると思います。女の子孫は単数形の“種”で、“彼”男性です。一人の男ということです。それが実はイエス・キリストであります。“種”という言葉は“精子”とも訳せる言葉です。精子のことを種と言います。馬であれば、種馬といった言葉もあります。女の精子とも解せるのですが、でもそれでは意味不明ということです。但し、イエス・キリストは正に女の精子という形でこの世に来られたわけです。それはマリヤが処女で懐妊したという事実です。女に精子なんかあるはずがありません。ヨセフの精子ではなくて、これは神の種です。それが処女マリヤの胎の中に植え付けられて、そしてマリヤは処女でありながらも男の子を身ごもって、そしてこの世にメシヤを送り出すことに選ばれる、女の中で祝福された人となるわけです。そのマリヤもアダムの子孫ということです。

で、**ガラテヤ 3 : 14。**『このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。』アブラハムへの祝福。これは創世記の内容を受けてのことです。**創世記 17 : 8**（『わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。』）を後で参照して頂くと良いかと思えます。

ちょっと飛ばして**ガラテヤ 3 : 16**に『ところで、約束は（アブラハムに対する約束は）、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言って、多数をさすことはせず、ひとりをして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。』ここでも“子孫たち”という言葉ではなくて、“子孫”という単数形です。イエス・キリストはアブラハムの子孫でもあるということは、**マタイの福音書 1 章**の系図でも明らかです。で、アブラハムとひとりの子孫、イエス・キリストに対する約束の言葉が実は『創世記』に記されているという、そういう内容です。

また、**黙示録 12 : 5。**『女は男の子を産んだ。（ここでいう“女”はイスラエルを指しています。イスラエルがひとりの男の子を産んだ。）この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。』結論から言うと、イスラエルが産んだひとりの男の子というのが、イエス・キリストのことを指しています。

で、**黙示録 12 : 17**に『すると、竜は（“竜”というのはサタンです。）女に対して（イスラエルに対して）激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。』イスラエルの子孫、そしてイエス・キリストを信じる者たちというのがここでの意味です。ですから、新約聖書の中にも女の子孫、それはイエス・キリストを指すということが言わ

れております。

で、もう一箇所ローマ 16 : 20。『平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてください。』“サタンを踏み砕く”という表現はあの原福音、創世記 3 : 15 にも見られるものです。“平和の神はあなたがたの足で”、これはローマ教会のクリスチャンたちの足でということを一義的に言っております。サタンを踏み砕いて下さいますと。教会はキリストのからだであります。ですから、ここで今の時代はキリストは教会というご自身のからだを用いてサタンの足を踏み砕くわけですが、究極的には世の終わりに再臨されて、文字通りイエス・キリストは完全にサタンを滅亡させるという、ゲヘナに投げ込むということをやさします。そういうイエス・キリストのことが『創世記』にあり、終わりの『黙示録』にまで記されているということを確認をして頂きたいと思えます。“鉄の杖で牧する”という言葉も先程黙示録 12 : 5 のところで読みましたが、黙示録 19 : 15 のところにイエス・キリストのことを指しているとして明確に書いてます。その女の子孫は鉄の杖をもって牧される。すべての民を牧されるとありましたが、黙示録 19 : 15 では『この方の口からは（再臨のキリストの口からは）諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。』この“鉄の杖をもって牧する”、牧会するという、羊飼いとて牧会するということを言っていますが、元々は詩篇 2 : 9 からこのフレーズは来ています。この詩篇 2 篇もメシヤ詩篇であります。『あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』補足で伝えておきます。ただ創世記は、“蛇であるサタンの頭を踏み砕く女の子孫”というイエス・キリストを描いている書物だということです。

次に第二番目の書、『出エジプト記』に移っていきたく思います。そこでのイエス・キリストは、“過ぎ越しの小羊”としてのイエス・キリストであります。出エジプト記 12 : 3~14。これは全部イエス・キリストについての内容です。『³イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。⁴もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。⁵あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。（“この月”というのは最初の月で、“ニサンの月”と呼ばれる月で太陽暦の3月から4月です。その十日に過ぎ越しの羊が一頭選ばれます。そしてその羊は傷のない一歳の雄の小羊でなければならないと。）⁶あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会が集まって、夕暮れにそれをほふり、』これはイエス・キリストが過ぎ越しの小羊として通られたところです。ニサンの月の十日からイエス・キリストはエルサレムで傷がないかどうか。罪がないかどうか。いろんな宗教指導者たちの審問を受けたわけです。全部イエスはそれをクリアして、実際に十四日というのが過ぎ越しの祭りのその日で、その日の夕暮れに小羊がほふられるのですが、イエス・キリストはその日の夕暮れ、丁度十字架に掛けられて午後3時に息を引き取られたわけです。日にちも時間もぴったりです。自分で日にちを選んで、死ぬ時間まで選ぶことは出来ないわけです。すべてこれは神が預言を成就された驚くべきものであるということです。

第1コリント 5 : 7。『新しい粉のかたまりのままに、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。』ここにハッキリ書いてあります。“私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。”二千年前のAD32年です。その時にイエス・キリストは過ぎ越しの丁度お祭りのその日にほふられたわけです。またヨハネの福音書 1 : 29 では、バプテスマのヨハネが、イエスの半年年上の親戚です。そのヨハネが、イエスが歩いているのを見て、『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。』と称しました。全世界の罪を取り除く神

の小羊がイエス・キリストであると。I ペテロ 1:19 ではペテロもこう言っています。『傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。』罪のないお方の血によったというふうにペテロは言っています。

※ 出エジプト記 12:7~14 は説教では読まれなかったが、参考に掲載します。

『⁷その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。⁸その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。⁹それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。¹⁰それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。¹¹あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは主への過越のいけにえである。¹²その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは主である。¹³あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。¹⁴この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。』

今度は3番目の書、『レビ記』に移ります。レビ記は、イエス・キリストが“大祭司”であるということを描いています。大祭司であるキリスト。特にこの大祭司に関してはレビ記の16章に詳しく書いてあります。これは長いので、開いて読むことはいたしません。ただイエスが大祭司であるということは、特に新約聖書の中では、ヘブル人への手紙の中に多く言及されていますので、ヘブル人の手紙の方からいくつかピックアップしていきたいと思えます。

ヘブル 2:17 『そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。』

そしてヘブル 3:1 『そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。』“大祭司であるイエス”とあります。その前には“信仰の使徒であり”とあります。イエス・キリストも使徒です。使徒と言ったら十二使徒をすぐ思うと思うんですが、ひとりの究極の使徒がイエス・キリストであります。“使徒”という言葉は、単に“遣わされた者”という意味です。アポストロス“apostolos”という言葉です。それから英語で“apostle”という使徒という言葉の意味の言葉が生じましたが、イエスの十二使徒もありますし、また聖霊による使徒たちもあります。これは聖書の中に出てくる特に『使徒の働き』等に出てくる使徒たち。彼らも実は十二使徒以外でも“使徒”と呼ばれている人たちも多いわけです。今で言えば宣教師のような働きをした人たちです。で、究極の使徒がイエスで、そして大祭司であるイエスと。考えなさいと。大祭司であるイエスのことを考える書物がヘブル人への手紙です。

そしてヘブル 4:14~15 『¹⁴さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。¹⁵私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。』

そしてヘブル 5:5~6 『⁵同様に、キリストも大祭司となる栄誉を自分で得られたのではなく、彼に、「あ

あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と言われた方が、それをお与えになったのです。別の個所で、こうも言われます。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」これは詩篇 2 : 7、詩篇 110 : 4 の引用となっています。どちらもメシヤ詩篇です。イエスが大祭司であるということを証しているわけです。

で、ヘブル 5 : 10 のところにも『神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司となえられたのです。』“メルキゼデクの位に等しい大祭司”なんて言葉は、今初めて聞きましたという人もあるかもしれません。そういう人のためにこのヘブル人への手紙が書かれていると言っても差し支えないですね。

ヘブル 6 : 20 『イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となられました。』で、メルキゼデクのことについてはヘブル 7 : 1 以降に詳しく出ています。ですから、そこは知らない方は、是非呼んで頂いて、後は創世記 14 章にオリジナルの記事が出ています。メルキゼデクについてはそこと、そしてヘブル 7 章に詳しく出ています。

で、ヘブル 7 : 26 『また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。』大祭司であるイエス・キリストこそ正に私たちに必要なお方です。誰が必要か。イエス・キリストが必要です。メルキゼデクの位に等しいお方。このメルキゼデクというのが受肉前のキリストを指しています。シャレム、またはサレムの王である。エルサレムの古い呼び名は、サレム若しくはシャレムと言います。王であり大祭司なんです。いと高き方の大祭司。それはレビ系の大祭司ではないです。アロンの子孫ではないということは明らかです。全く別の、別次元の大祭司と言って良いと思います。

で、ヘブル 8 : 1~3 『¹以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、²人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。³すべて、大祭司は、ささげ物といけにえとをささげるために立てられます。したがって、この大祭司も何かささげる物を持っていなければなりません。』イエスは天にご自身の血を携えて、天の真の聖所、神殿に入られて、永遠の贖いを成し遂げられた、ということがヘブル人への手紙に書いてあります。ですから、過ぎ越しの祭りの日に十字架の上ではふられて、神の小羊としてと殺された。そこで終わったんじゃないです。イエスは同時に大祭司であって、甦って、そのご自身の血を持って、十字架の上では祭壇じゃないですから、罪の贖いが出来ないわけです。罪の贖いは祭壇でなければならぬわけです。神殿の祭壇、それは天の真の聖所にあったので、そこにイエスは上っていかれたと。それが丁度、葬られている間、三日間のインターバルの中でイエスが成されたことのひとつです。地上に復活されて出てくる前に、このヘブル人への手紙の中に書かれている通り、イエスはその間、霊において天に上げられたわけです。そして、そこでご自身の血を天の真の聖所の祭壇におささげになったんです。それによって永遠の贖いが成し遂げられました。天でなされたので時間は関係ないです。ですから、イエスより以前の人、そしてイエスの時代の人、そして今の時代の人、すべてカバーできるわけです。単にイエスが二千年前、エルサレムの郊外で十字架に掛かって死んだだけであれば、その時代の人たちの罪はカバーできたかもしれませんが、でも永遠の贖いにはならないわけです。でも、イエスは確かに大祭司として天に上げられました。この方が正に私たちに必要です。

で、今度は 4 番目の書『民数記』に移りたいと思います。民数記のイエス・キリストは、“いのちのパン、生ける水”です。民数記 11 : 9 『夜、宿営に露が降りるとき、マナもそれといっしょに降りた。』“マナ”という荒野の民を養う天からのパンが、この“マナ”というものです。“これは何だろう。”という意味が“マナ”です。森永の“マンナ”という子供のビスケットがありますけれども、その“マンナ”というのは、“マナ”のことです。“これは何だろう。”というビスケットです。昔からありますし、今もあります。

勿論森永は創業者の森永太郎がクリスチャンなので、エンジェルマークもそうですが、そういった聖書の由来のものもあります。で、この“マナ”こそ、実はイエス・キリストを指しているということは、後で開きたいと思います。

今度は民数記 20 : 8 『杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。あなたは、彼らのために岩から水を出し、会衆とその家畜に飲ませよ。』 荒野では食べ物も無くて、ですから天からのパンが、マナが降ってきて彼らを養ったんです。水も無かったんです。でも、水も岩から出たわけです。で、この“岩”というのが、実は彼らの行く先々に移動してついて来るんです。その辺の岩じゃないんです。岩がずっと歩いてついて来るという、凄いですね。冗談で言ってるんじゃないくて、本当にそういう岩だったんです。

で、今度は新約聖書でそのことを確認していきたいと思います。

ヨハネ 6 : 35 『イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことはありません。』

ヨハネ 6 : 48 『わたしはいのちのパンです。』

ヨハネ 6 : 51 『わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。』

聖餐式で私たちはキリストのからだとしてパンを頂きます。

また水については同じく

ヨハネ 4 : 10 『イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか。』

神の賜物、それは“生ける水”。そしてその“生ける水”は他ならぬ救い主イエス・キリストであります。

で、同じくヨハネの福音書 7 章 37~38 節 『³⁷さて、祭りの終わりの大いなる日に（仮庵の祭りのクライマックスに）、イエスは立って、大声で言われた。（仮庵ですから荒野の天幕生活時代、それを忘れないように、覚えて記念するように祝うわけです。天からマナが降ってきた。岩から水が湧き出た。そうやって私たちは神によって養われ、守られて、導かれてきたと。そのことを感謝するお祭りです。）「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。³⁸わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』

そして第 1 コリント 10 : 4 『みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た（“彼らについて来た”とあります。岩がずっと移動してついて来たわけです。）御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。』だれでも渇いているなら、わたしのところに来て、岩に来て飲みなさいと言ってるんです。で、イエスが正にその“岩”であると、そうパウロが指摘しています。

で、黙示録 21 : 6 『また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。』

並びに黙示録 22 : 17 『御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。』

天にもいのちの水の川が流れていて、それも全部イエス・キリストを指し示しております。イエス・キリストが「わたしから飲みなさい。ただで飲みなさい。」と、そういう招きの言葉が黙示録にも記されています。

今度は 5 番目に『申命記』を見ていきたいと思います。申命記のイエス・キリストは、“モーセのような預言者”です。“第二のモーセ”とも言っても良いと思います。

申命記 18 : 15 『あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。』モーセのような預言者。これが必ず後に現れると言われてます。

で、申命記の終わりの 34 章 10 節にはこう書いてあります。『モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、顔と顔を合わせて選び出された。』しかし、旧約聖書が終わって、マラキ書が終わって、マラキ書からマタイの福音書までの 400 年間、その時代にはひとりの預言者も現れずに、暗黒時代があったわけです。それは“沈黙の 400 年間”と呼ばれる時代です。でも、その沈黙を破ってモーセのような預言者が出現したのであります。それがイエス・キリストであります。

ヨハネ 1 : 19~21 『¹⁹ヨハネの証言は、こうである。(ヨハネと言っても、これはヨハネの福音書を書いた使徒ヨハネではなくて、バプテスマのヨハネです。ヨハネの福音書で“ヨハネ”と出てきたら、全員バプテスマのヨハネです。使徒ヨハネは自分のことを名前では明かしていません。むしろ“イエスに愛された弟子”という、本名を語らず自分の名前を伏せて匿名で語っています。)ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか。」と尋ねさせた。²⁰彼は告白して否まず、「私はキリストではありません。」と声明した。²¹また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」(“あの預言者”というのが申命記 18 : 15 の“モーセのような預言者”です。)彼は答えた。「違います。」²¹そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」』と言って、自己紹介をするわけです。で、その後バプテスマのヨハネは、イエスを指し示していくんです。それが彼のミニストリーでした。ヨハネ 1 : 29 で『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。』と、そのようにイエスのことを呼んでいます。

そしてヨハネ 1 : 45 節を見て下さい。『彼は(“彼”というのはピリポです。十二使徒のひとりで、ピリポは友人の)ナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。』ピリポも、『モーセ五書』は確かにモーセの作だということを認めています。律法は、“トーラー”というのが『モーセ五書』です。これはモーセのもので、その中にイエスのことが書いてある。で、預言者たちのことも書いてあると。“モーセのような預言者”というの、イエス・キリストを指すということが明らかになります。

使徒の働き 3 : 21 『²²このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。²²モーセはこう言いました。『神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。』申命記 18 : 15 を引用していて、それが正にイエスだと言っているわけです。使徒の働き 3 : 20 を見て頂いても『イエスを、主が遣わしてくださる。』と、それが“モーセのような預言者”だと言ってるわけです。

で、使徒の働き 7 : 37 『このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。』と言ったのです。』これはステパノの説教の一部ですが、これも勿論イエス・キリストのことを指して言っているわけです。「モーセはわたしのことを書いたのです。」とイエスはおっしゃいましたが、正にその通りです。

ちょっと時間をかけましたけれども、『モーセ五書』創世記から申命記まで、全部イエスについて書かれています。これが 66 巻の土台の部分なので、多少時間をかけましたが少しずつペースアップを図っていきます。

今度は6番目の書『ヨシュア記』です。“ヨシュア”というのは、実は“イエス”という名前です。ヘブル語で“イエシュア”と言います。それをギリシャ語の音読みで“イエスース”と言います。“イエスース”、それをラテン語で“イエズス”と言います。イエズス会の“イエズス”で、私たちは“イエス”と呼んでいますが、ヨシュアも、イエスも、全く同じ名前です。『ヤーウエは救い』という名前の意味です。ありふれた名前です。でも、意味は『ヤーウエは救い』主は救い“ということなので、正にキリストを表す名前としてはぴったりです。”キリスト“が肩書で、”イエス“が名前です。

で、ヨシュア記 5:13~15 にイエス・キリストが現れています。『¹³さて、ヨシュアがエリコの近くにいたとき、彼が目を上げて見ると、見よ、ひとりの人が抜き身の剣を手に持って、彼の前方に立っていた。ヨシュアはその人のところへ行って、言った。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか。」¹⁴すると彼は言った。「いや、わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。」そこで、ヨシュアは顔を地につけて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか。」¹⁵すると、主の軍の将はヨシュアに言った。「あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる所である。」そこで、ヨシュアはそのようにした。』抜き身の剣を手に持ったひとりの人は、“主の軍の将”と呼ばれています。これこそが受肉前のキリストです。そして、この方が実は荒野の民を約束の地に導いた立役者です。ヨシュアはその方の実は道具に過ぎなかったということです。すべて背後においてこの“主の軍の将”が戦われたので、ヨシュアは行く先々で勝利を得たわけです。“約束の地に導く主の軍の将”、これが受肉前のキリスト、それがヨシュアです。本物のヨシュアです。

で、この抜き身の剣を持った人というのは、実は民数記 22 章においても、特に 22~23 節、そして 31 節。そこには、バラムという偽預言者に対して、やはり抜き身の剣を持った受肉前のキリストが現れています。ロバが見えたんです。ロバは目の前に抜き身の剣を持つイエス・キリストを見たので、びっくりして立ち止まったんですが、バラムには見えてなかったの、言うことを聞かないロバをバラムは一生懸命叩いたりしたわけです。皆さんもよくご存知の箇所なので聞くことはしません。また、実はダビデにも現れています。抜き身の剣を持った受肉前のキリストは、あのダビデにも現れています。第 1 歴代誌 21:16 『ダビデは、目を上げたとき、主の使いが、抜き身の剣を手に持ち、それをエルサレムの上に差し伸べて、地と天の間に立っているのを見た。ダビデと長老たちは、荒布で身をおおい、ひれ伏した。』ですから、度々同じ姿で現れているんです。最初はバラムに、次はヨシュアに、そしてダビデに現れてます。

第 2 テサロニケ 1:7 『苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。』イエス・キリストは“主の軍の将”だと言われています。“万軍の主”とも呼ばれるお方です。天の大軍勢を率いておられる大將軍です。ヨシュアにも優る、ダビデにも優るお方です。で、その方が報いとして安息を与えて下さる。この“安息”というのは、約束の地の形容でもあります。ヨシュアはこの“主の軍の将”によって、安息を得たわけですが、でも、その安息というのは勿論地上限りの一時的な、表面的な安息でしかなかったわけですが、でも、この“主の軍の将”であるイエス・キリストは、真の安息、これを与えることの出来るお方です。そのことがヘブル 4 章に詳しく書かれています。1 節から読んで頂きたいところですが、特にヘブル 4:8~9 だけをお読みします。『⁸もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。⁹したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。』まだ本物の安息が残っていると。もっと素晴らしい比べようのない本物の安息が、イエス・キリストによって与えられる、ということがここに書かれています。で、イエス・キリストが“主の軍の将”であるということは、イエスご自身もマタイ 26:53 で証ししておられます。『それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。』1 軍団はローマの“レ

ギオン”と呼ばれる 6000 人の編隊のことを言っています。6000 人×12 軍団、勿論これは概数です。12 というのは、完全数なので、御使いの数の実数を言っているではありません。むしろヘブル人への手紙では、御使いの数は無数と言われている位です。おびただしい数です。“万軍の主”ともイエスが呼ばれますので、それだけの軍団をイエスは率いておられるということです。ですから、この方が共にいて下されば、怖いものなしということです。かつてアッシリア帝国の精鋭にエルサレムが包囲された時も、イエス・キリストが受肉前のキリストとして、一夜にして 18 万 5 千人ものアッシリア帝国の精鋭を滅亡させてしまったということが言われています。御使いの力を借りるまでもないことです。ですから、本来であれば今このマタイ 26 章の時点で、イエスは逮捕されるんですけども、その時にローマの一隊も逮捕に関わるわけです。6 千人じゃなくて、600 人位です。でも、イエスは 6 千人のレギオンの 12 倍の御使いたちを今すぐにも呼び寄せることが出来るんだと。そうやって、剣を抜いたペテロをたしなめたわけです。「あなたのプロテクションは要らない。」と、「ボディガードはわたしには要らない。」と、そうおっしゃってるわけです。自ら進んで捕縛されて、自ら進んで十字架の上に掛かって死なれていくわけです。それは神のみこころを行なうためでした。そのためにイエスはご自分のからだを与えられたと、もうクリスマスのその日にイエスはそう宣言された、ということは、先程の冒頭に読んだヘブル人への手紙でも、イエスはこの世界に来て神のみこころを行なうために、神がからだをつくって下さったということを宣言されているわけです。

で、今度は 7 番目の書、『士師記』です。士師記は、暗黒の書です。失敗ばかり繰り返すイスラエルの民が、私たちに正にピッタリ重なるわけです。“失敗を繰り返す神の民を憐れむ不思議という名の主の使い”、それが受肉前のキリストとして現れています。名前を“不思議”と言います。士師記 13 : 18 に出てきます。『¹⁸主の使いは彼に言った。「なぜ、あなたはそれを聞こうとするのか。わたしの名は不思議という。」(“彼”というのは、マノアという人です。サムソンのお父さんです。)¹⁹そこでマノアは、子やぎと穀物のささげ物を取り、それを岩の上で主にささげた。主はマノアとその妻が見ているところで、不思議なことをされた。(この“主の使い”の“主”は太字になっています。普通“主の使い”と読むと、御使い、いわゆる天使を皆さん想像すると思うんですが、その“主の使い”は、主ご自身であると。で、その後も)²⁰炎が祭壇から天に向かって上ったとき、マノアとその妻の見ているところで、主の使いは祭壇の炎の中を上って行った。彼らは地にひれ伏した。²¹—主の使いは再びマノアとその妻に現われなかった。—そのとき、マノアは、この方が主の使いであったのを知った。²²それで、マノアは妻に言った。「私たちは神を見たので、必ず死ぬだろう。』『“主の使い”を神と言っているわけです。神を見たらもちろん死ぬわけです。もちろん死ぬことはなかったので、その後サムソンが生まれて来るんですが、神が三位一体の神であるということとはよく知っていると思います。父なる神、子なる神、聖霊なる神。で、ここでは子なる神が、“主の使い”という形で現れたわけです。ヨシュアには“主の軍の将”として現れたわけですが、ここでは“不思議という名の主の使い”、“主の使い”はもうアブラハムにも現れています。創世記 22 章 : 11, 12 節 (『¹¹そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」¹²御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。』)では、アブラハムがイサクを全焼の生贄として神にささげるんですが、それが正に“主の使い”に対してささげたということになってるんです。読めば分かります。“主の使い”は神ご自身だと。で、それは受肉前のキリストを指しています。

または、出エジプト記 3 章 2 節 (『すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。』)で燃える柴の中からモーセに現れた“主”も“主

の使い”であります。で、それも主ご自身です。で、その時もモーセは、マノアと同じようにその方の名前を聞いて、「わたしはある」というものである。」という神の個人名、ヤーウェという名前の由来を聞くわけです。

で、この士師記 13:18 では“不思議”という名前を新たに明かしております。“不思議”、確かに不思議な方です。で、これは後でも開きますが、イザヤ 9:6 では“不思議な助言者”とイエスのことが言われています。全く同じ言葉です。“不思議”という言葉は全く同じ言葉です。英語では“ワンダフル” wonderful という言葉です。確かにイエスは、ワンダフルなお方です。

で、使徒の働き 3:20。さっきもちょっと読んだんですけども、『それは、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。』“失敗を繰り返す神の民を憐れむ不思議という名の主の使い”が、士師記の時代にはマノア夫妻に現れたわけです。そして、彼らを通してサムソンが士師として、さばきつかさとして現れて、正に救い主のような働きをしたわけです。でも、サムソンが大失態したということは皆さんも知っての通りです。でも、後の時代に主の御前から回復の時に来て、サムソンよりも遥かに優れた救い主が、解放者が現れるわけです。それが“ナザレのイエス”と呼ばれる方、この方は罪を犯すことのない方です。そういうふうにして対応しています。正に不思議な方です。ワンダフルな方です。本来見捨てられて然るべき者です。散々預言者を退けて、拒んで、そして気に食わなければ殺害して、処刑してきた、そんな頑ななイスラエルの民に対して、主はなおもご自身の御子をもって、救いを与えようとされる。人間の理解を遥かに超えた方です。不思議な方です。

そして、8 番目の書、『ルツ記』。このルツ記は、異邦人の花嫁ルツ。モアブ人です。イスラエル人ではありません。そのルツとユダヤ人のダビデの先祖となる人、ボアズという人の恋愛物語というか、ラブロマンスの短い書物ですが、その異邦人の花嫁と、ボアズという買い戻しの権利のある親類という人の話です。何の事かと思うかもしれませんが、“買い戻しの権利のある親類”という言葉は、ヘブル語では一語で表現されて、それを“ゴエル”と言います。“ゴエル”という言葉は“贖う”という意味です。ですから、“贖う方”とか、“贖い主”という時にも“ゴエル”という言葉が使われています。で、その“贖う”というのは“買い戻す”という意味です。何らかの理由で貧しくて、土地を手放してしまった。或いは、身売りしなければならなくなった。でも、そうした手放してしまったものを買い戻す権利を持つ親類というのがいるわけですね。お金持ちの親類であれば、その人が代わりにその借金を払って、手放してしまった土地若しくは人を買戻すことが出来るわけですね。それをボアズがして、ルツを買戻すわけですね。で、ルツとボアズは結婚するわけですね。異邦人と結婚するユダヤ人の男性。それは正にイエス・キリストの型であるわけですね。ボアズはイエス・キリストの型であって、そしてその花嫁は、異邦人のルツは、私たち教会のひな型であります。ですから、ルツ記の受肉前のキリストは、“異邦人の花嫁ルツの買い戻しの権利のある“ゴエル”と呼ばれる方”です。ボアズです。ルツ記 4:8 『それで、この買い戻しの権利のある親類の人はボアズに、「あなたがお買いなさい。」と言って、自分のはきものを脱いだ。』ボアズよりもっと近い親類がいたんですが、その人は放棄したんです。で、次にボアズがその権利を持っていたので、権利が委譲された。で、“買い戻し”というところに*印がついていて、欄外には「ヘブル語で“ゴエル”」と書いてあります。それは、本来は“贖うもの”という直訳です。で、黙示録 5:4~5 に、そのボアズの本来の本家本元、ボアズは影でしかないということで、本体であるイエス・キリストのことが出ています。買い戻しの権利のある贖うお方として出ています。『⁴巻き物を開くのに、見るのに、ふさわしい者がだれも見つからなかったんで、私は（使徒ヨハネは）激しく泣いていた。⁵すると、長老のひとりが、私に言った。（これは天における情景です。幻です。）「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たし、ダビデの根が勝利

を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。』これを説明すると時間がなくなるので、簡単に言いますと、実は**黙示録 5 章**の頭から出ているのですが、ここに出てくる“巻き物”というのは、“地球の土地の権利書”と考えて下さい。それが最初の人アダムとエバに託されていたわけです。でも、アダムは罪を犯して、その土地の権利書をサタンに売ってしまったんです。ですから、サタンはその権利を得てこの世を支配する者、この世の神として君臨するようになったんです。でも、それを買い取るということは誰も出来なかったわけです。で、その買い取るのにふさわしい方がここに現れたわけです。それが“ユダ族から出たしし、ダビデの根”と呼ばれるイエス・キリストです。この方はアダムの子孫でありながら、罪を犯していない方です。この方のいのちをもって罪の代価が支払われて、そしてサタンに隷属していたこの世はすべて買い取られたわけです。その中に私たちも含まれているわけです。ですから、イエスは自分のいのちをもって買い取って、私たちのような異邦人を自分の妻として、キリストの花嫁として招き入れて下さったわけです。迎え入れて下さったわけです。素晴らしい話です。

で、9 番目の書、『**第 1 サムエル記**』。そこでは“**エッサイの子供で油注がれた王**”。そして受肉前のキリストのことが描かれています。エッサイというのがダビデのお父さんです。でも、イエスは“**エッサイの根**”というふうにも呼ばれています。これはメシヤの称号のひとつで、“エッサイの根”。さっき“**ダビデの根**”という言葉が**黙示録 5 章**に使われていましたが、“エッサイの根”という言葉は**イザヤ 11 : 10**に出ている言葉です。『その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。』ですから、エッサイの子孫からメシヤが出てくると。で、その方は油注がれた王となる。**第 1 サムエル 16 : 12~13**に書いてあります。『¹²エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。主は仰せられた。「さあ、この者に油を注げ。この者がそれだ。」¹³サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真中で彼に油をそそいだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。』“油注ぎ”というのは、“聖霊が注がれる”ということです。この時既にサウルが油注がれた王でしたけれども、サウルは神に背いて、その王位を退けられていたわけです。名ばかりの、形だけの王だったんです。で、ここで預言者サムエルを通して、最後の士師、最後のさばきつかさを通して、ダビデ少年に油が注がれて、聖霊が注がれたということです。正式にダビデが王となっていくわけです。すぐに王座に着くわけじゃないです。そのことは皆さんも知っての通りです。でも、これが正に受肉前のキリストを表す影となっていくわけです。ひな型となっていくわけです。

で、**使徒の働き 13 : 22~23**。『²²それから、彼を退けて（“彼”というのはサウロです。）、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行する。²³神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました。』』

で、**ローマ 15 : 12**『さらにまた、イザヤがこう言っています。「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。』これが**イザヤ 11 : 10** の言葉です。エッサイの根、これがイエスのことを指しています。

で、続く 10 番目の書『**第 2 サムエル記**』であります。そこには“**永遠の王座に着くダビデの子**”としてイエス・キリストのことが呼ばれています。“**永遠の王座に着くダビデの子**”、**第 2 サムエル記 7 : 12, 13**に『¹²あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。¹³彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をどこしえまでも堅く立てる。』で、**16 節**に『あなたの家とあなたの王

国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』永遠の王座に着くダビデの子、それがイエスのことです。イエスが、ダビデの子孫だということは、マタイの福音書1章の系図にも明らかです。『アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。』とマタイ1:1にあります。また、ヨハネ7:42『キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。』と、その聖書とは旧約聖書です。第2サムエル記7:1,13,16のことも入ってます。で、使徒の働き2:30『彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりをして彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。』“彼”というのは、ダビデ。ダビデは王でありながら、預言者でもあったということです。ですから、神が彼の子孫のひとりをして、彼の王位に着かせるということは、預言者として理解したと。それがメシヤのことだというふうに預言者でもあったダビデは理解出来たと知っているわけです。

で、11番目の書は『第1列王記』です。ダビデの後継者ソロモンが中心となっていきますが、ソロモンに優るお方がキリストであります。ソロモンは偉大な王でありました。歴史上最大の知恵者と言って良いと思います。最大の富豪にして、最大の知恵者です。第1列王記3:12にソロモンのことが書いてあります。『今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。』凄い評価です。

しかし、マタイ12:42を見て下さい。『南の女王が（シェバという国です。）、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。』ソロモンよりも優れた富豪、ソロモンよりも優れた大賢者がここにいるということです。それは勿論イエスのことです。

で、12番目の書、『第2列王記』。そこでのメインキャラクターは、あの偉大な預言者エリヤです。預言者の代表と言えばエリヤです。その“エリヤの神、エリヤの主”。それが受肉前のキリストであります。第2列王記2:14『彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか。」と言い、彼が再び水を打つと、水が両側に分かれたので、エリヤは渡った。』エリヤは確かに物凄い偉大な預言者でしたけれども、でもそのエリヤが行なった一つ一つの眼を見張るようなセンセーショナルな奇跡の業というのは、エリヤ自身の力に因るものではなくて、実はエリヤの神、主によるものだったということが、後継者のエリヤによっても確認されます。ですから、凄いのはエリヤの神、主であります。それが受肉前のキリストご自身であります。

ルカ1:17『彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。』“彼こそ”というのは、バプテスマのヨハネのことを言っています。彼はエリヤの霊と力を受けたものです。

で、続きでルカ1:43,44バプテスマのヨハネのお母さん、エリサベツのことです。『⁴³私の主の母が（エリサベツの主の母。それはマリヤのことです。エリサベツの主というのは、そのエリサベツのお腹の中にいる胎の実であるバプテスマのヨハネの主でもあります。ですから、ヨハネの主、エリヤの霊と力を受けた者の主、それはイエスのことです。）私のところに来られるとは、何ということでしょう。⁴⁴ほんとうに、あなたのあいさつの声私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。』バプテスマのヨハネが、もうエリサベツのお腹の中でイエスを前にして賛美したと言っているわけです。

そして、76,77節お父さんのザカリヤの言葉です。『⁷⁶幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼

ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、⁷⁷ 神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。』“幼子よ”と言っているのは、バプテスマのヨハネのことを言っています。“いと高き方の預言者”、それがヨハネのことですが、その“ヨハネの主”というのは勿論イエスのことです。主の御前に先立って行く。イエスの前に先立って行くのが、先駆者ヨハネです。ですから、ヨハネの主はイエス・キリストであります。で、ヨハネの主というのは、エリヤの主であるわけです。

で、今度は13番目の書、『**第1歴代誌**』。これは特に南ユダ王国の歴史を言っていますが、その“**南ユダ王国の王位継承者**”が、約束のメシヤとなるわけです。さっきのダビデの話にも繋がっていきます。それについては、開くことはしません。**第1歴代誌の1章～9章**に、その南ユダ王国の王様たちのことが書いてあります。で、その究極の子孫が、真の王、王の王、主の主であるイエス・キリストであるということで、**マタイの福音書1章**を見て頂くと、全く同じ系図が出ています。ただ、簡略化された形で全員の名前は出ていませんけれども、でも実際に南ユダ王国の王たちの名前をイエスの系図の中に確認することが出来ます。そして、**マタイ1章**だけじゃなくて、**ルカ1:32,33**に『³²その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。³³ 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。』**ダビデに約束された通りのこと**です。

そして先程は**黙示録5:5**から“ユダ族から出たしし”、イエスのことです。ダビデはユダ部族の出身です。王家はダビデの子孫となっていくんですが、ユダ族から出たしし、ダビデの根、それがイエスであります。**黙示録22:16**に『「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」』と。イエスこそ正に南ユダ王国の王位継承者であって、その方が“ダビデの根”と呼ばれる救い主です。ダビデの星というのが、イスラエルの今の国旗にあしらわれていますけれども、イエスは“**ダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。**”と呼ばれています。

で、『**第2歴代誌**』そこではソロモン神殿のことが中心に語られていますが、イエスは、受肉前のキリストは、神殿と重ねられて、この方は“**神殿よりも偉大な方**”であると、**第2歴代誌1～7章**に神殿のことが書いてあります。これも読みませんが、箇所だけ伝えておきます。

で、**マタイ12:6**に『あなたがたに言いますが、ここに宮より（神殿よりも）大きな者がいるのです。』と言って、イエスのご自分のことを紹介しています。エルサレム神殿よりも大きな者。マタイの福音書の書かれた時代は、今から二千年前で、ヘロデ大王が大増築をして、大改築をして、ソロモン時代よりも遙かに大きな神殿を建て上げたという背景があります。でも、そんな巨大な建造物よりも、もっと大きい。ですから、ソロモンの宮よりも大きいどころか、ヘロデ大王の作った大神殿、当時の世界七不思議のひとつに数えられたような巨大な神殿ですが、それよりも大きいと、そうイエスはおっしゃってるわけです。

で、15番目の書、『**エズラ記**』は、バビロン捕囚によってエルサレム神殿が破壊され、エルサレムの町も陥落して、ユダヤ人たちは捕囚となって、世界に散り散りばらばらになってしまったんですが、再び70年の時が満ちて、エレミヤの預言の通り、70年間という時が満ちて、神の約束が実現して、彼らは祖国に帰還が許されて、そして祖国の再建にもたずさわることが出来たわけです。そこで、エズラは、祭司として、律法学者として、霊的な指導者となって、再建事業にあたるんですが、そのエズラ記の中には、神殿の再建について書かれているわけですが、その“**破壊された神殿の再建者**”が実は受肉前のキリストであると。この内容も**エズラ記の1章～6章**にあります。これも読むことはいたしません。

でも、その破壊された神殿を再建するということについては、イエスが**ヨハネ2:19～21**で、ご自身こ

う言われています。『¹⁹ イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」²⁰ そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は（ヘロデ大王の大改築した、大増築した大神殿は）建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」²¹ しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。』その“からだの神殿”は確かに十字架の上で破壊されたわけです。しかし、イエスはそれを三日で立て直したわけです。

で、16番目の書、『ネヘミヤ記』は、やはりバビロン補修の後、70年経て、エルサレムの帰還が許されて、ネヘミヤ記にはエルサレムの城壁を再建するという内容が記述されております。その中で、イエスは“新しいエルサレムの城壁となって下さるお方”として描かれています。これはネヘミヤ記の1章～7章に書かれている内容で、究極のエルサレムの城壁はイエス・キリストご自身です。これについては黙示録21:12～23、それを参照してみてください。これは長いので読みませんが、天の新しいエルサレムの城壁、地上のエルサレムとは比べようがないものですが、もう都そのものがイエス・キリストをすべて表しているわけです。神殿もイエス・キリストを表しているということが、天のエルサレムにおいて見ることの出来るものです。

で、17番目は『エステル記』です。エステル記、神様の名前が一回も出て来ないものですが、でもそこにはやはり受肉前のキリストが描かれています。神の民が、イスラエルの民が、絶滅しようとしている。旧約聖書のヒトラーとよくあだ名されるハマンという人が、ユダヤ民族を根絶しようとするのが発覚するんですが、その根絶を寸前のところでいのちを張って打ち砕いたのが、その計画を打ち砕いたのが、エステルという王妃であり、またおじさんのモルデカイという人です。その“神の民を絶滅から救い出す者”が、実はイエス・キリストであるということで、エステル記7:4『私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、殺害され、滅ぼされることになっています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたでしょうに。事実、その迫害者は王の損失を償うことができないのです。』これはエステルが言っている言葉です。その神の民を滅亡から救うのが救い主です。

ローマ11:26～27『²⁶ こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬度を取り払う。²⁷ これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」』イザヤ59:20,21の引用ですが、“イスラエルはみな救われる”というのは、いつの段階でそう言っているのかということ、世の終わりです。世の終わりにハマン以上の、或いはヒトラー以上の反ユダヤ主義者が登場します。その人は、“反キリスト”と呼ばれる者で、この反キリストによってイスラエルは根絶やしにされようとするわけです。で、丁度反キリストの率いる軍隊と、そして同じくエルサレムの覇権を巡って東からも二億人の歩兵を連れた中国を中心とする東アジアの軍勢。で、他にも世界各地から連合軍がやって来て、エルサレムの覇権を巡る最終戦争が起こります。それが、ハルマゲドンの戦いで、それによってイスラエルが正に根絶されようとしていたわけです。そこに天から救い主イエス・キリストが王の王、主の主として現れて、一瞬にしてそれらの世界連合軍を駆逐してしまうわけです。そうして、イスラエルは、その方が、自分たちを救って下さった方が、旧約聖書の時代からずっと約束されていたメシヤであると気付いて、彼らは救われるんです。物理的にも救われますし、霊的にも救われるわけです。

で、今度は『ヨブ記』です。ヨブ記19:25を開いて下さい。世の終わりに、“終末に地上に立たれる贖い主”として受肉前のキリストが描かれています。『²⁵ 私は知っている。私を贖う方は生きておられ（贖う方、買い戻しの権利のある親類です。ゴエルです。）、後の日に（世の終わりの日に）、ちりの上に立たれる

ことを。』贖う方、神が大地に降り立つと言っているわけです。そして続きに『²⁶私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。²⁷この方を私は自分自身で見ると。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。』ヨブが言っているのは、「私は死んでも甦って、そして自分の目で世の終わりになったら、贖う方、救い主の前に立って、この方を直接見るんだ。」と、復活信仰をヨブは述べているわけです。もうアブラハムと同じ時代の人です。四千年前の人既にこのような復活信仰を持っていたわけです。“世の終わりに、終末に地上に立たれる贖い主”。これがキリストです。

マタイ 26 : 64 『イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりに。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が（イエスが）、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。』」イエスは目に見える形で地上に戻って来られる。再臨ということです。

そして、使徒の働き 1 : 11 『そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。』」目に見える形でまた戻ってくると、御使いが言ってます。で、使徒の働き 3 : 21 『このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。』万物の改まる時が来たら、天から地に下って来るということ、示唆しているわけです。

そして、19番目の書、『詩篇』。そこではイエスは“賛美されるべき方”として描かれています。詩篇 145 : 3 『主は（太字の主ですから、ヤーウェは）大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。』勿論この主というのは、三位一体の神を全部表していますが、その中に、イエスも含まれています。受肉してからも、赤ちゃんの姿でも、イエスは礼拝されたわけです。賛美を受けたんです。マタイ 2 : 11。東方の博士たちと呼ばれるものです。伝統的には三人来たと言われてますが、三人とは書いてありません。東方というのは、昔のバビロンで、今のイラクです。そこからやって来たわけです。かつてダニエルが、バビロン捕囚の時代、その地で仕えて、ここで言われている博士たちのお手本となったわけです。彼らの実際の命を守ったのも、ダニエルという人で、ダニエルはイエス・キリストが到来することを預言していました。そのダニエルの預言したものを、博士たちという天文学者たち、彼らは研究して、そして救い主が登場するというその時期を突き止めたわけです。ただ、この博士たちはイエスの誕生には立ち会っていません。ですから、よく絵本とかでも出ていますが、羊飼いと東方の博士たちが、三人が同じく馬小屋でイエスを拝んでいるというところがありますが、実際には博士たちは馬小屋には行っていません。それから遅れて 2,3 年後のことです。そのことは聖書から明らかです。そこは馬小屋とも勿論聖書にはありませんけれども、家畜のいた洞穴です。でも、この 2 章の段階では、そこは家畜小屋ではなくて、家であるということも分かります。『¹¹そしてその家には行って（家畜のいるところじゃないです。これは家です。ですから、時間差があるということです。先に羊飼いたちが生まれたたのイエスを拝んで、それから二三年経ってから、東方の博士たちがやって来て、ヨセフとマリヤの暮らしている家に来て）、母マリヤとともにおられる幼子を見（赤ちゃんじゃないです。嬰兒じゃなくて、幼子を見）、ひれ伏して拝んだ。（二三歳の子供の前で、彼らは礼拝したんです。）そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。』三つの贈り物があるので、三人の博士たちとなってますけれども、聖書には三人とは書いてありません。複数だったということは明らかですけれども、30 人だったかもしれませんし、300 人だったかもしれません。何年もかけて彼らは命がけでラクダか何かに乗って、歩いてきたわけです。

で、ここでイエスは賛美を受けるにふさわしい方であって、黄金は王としてふさわしい贈り物。乳香は

大祭司が使うものです。没薬は死人に使われるものです。防腐剤に使われるわけですがけれども、それは預言者が死ぬからです。王も、祭司も、預言者も皆油注がれて行くわけです。ですから、それがキリストです。キリストとは“油注がれた者”。王であり、祭司であり、預言者である。その三つの職務を全部三つとも兼ね備えた人が、唯一、たった一人、ナザレのイエスだけ。そのお方が唯一の救い主だということです。彼は神なので、礼拝を受けるにふさわしい方です。東方の博士たちは異邦人でしたけれども、彼らはイエスを拝んだんです。

で、**マタイ 28:9**。イエスが復活された時の場面。『すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう。」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。』“おはよう。”と言うのは、おそらくヘブル語で挨拶したと思うので、ヘブル語では“シャローム”です。そして、“イエスを拝んだ”とあります。復活のイエスに出会って、イエスを拝んだわけです。ただの人間じゃないです。

黙示録 5:12~14を開いて下さい。『¹²彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は（イエスのことです）、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」¹³また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と（父なる神と）、小羊（イエス・キリスト）とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」』¹⁴また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。』これは天の情景です。4つの生き物というのは御使いの最高位のもので、ケルビムとかセラフィムと呼ばれるものたち。で、天においてイエス・キリストは賛美を受けるにふさわしい方として、永遠に礼拝を受けています。聖霊は出てきません。父と子だけです。聖霊は直接礼拝を受ける方じゃないです。聖霊は、性格的には、表に出ない方です。聖霊は、イエスのものを受けて、イエスのものを表す。聖霊はイエスの栄光を表す働きをします。ですから、常に裏方のようなもので、教会の中でやたらめったら「聖霊様、聖霊様」と言って、特にペンテコステ派とか、カリスマ派とか、聖霊派と呼ばれているグループでは、今は聖霊の時代だから、もう兎に角聖霊を全面に押し出して、何でもかんでも、聖霊だ、聖霊だと言いますがけれども、それを迷惑しているのは聖霊ご自身です。あまり私のことは表に出すな、というのが聖霊のご性質であります。聖霊は、イエス・キリストが前面に出されることを、誰よりも望んでいます。それが聖霊の喜ばれることです。まあ、話はまた飛んでしまうので、これで終わりますけれども、安心して下さい。今日はこれで終わりたいと思います。まあ、半分位しか出来ませんでしたけれども、また次週に箴言以降を見ていきます。受肉前のキリストは、旧約聖書の中に現れていますけれども、また栄光のキリストの姿も、天におけるイエスの姿も、出てますので、それは私たちが顔と顔を合わせて見る姿となっていきます。是非楽しみにして頂いて、この方を知れば知るほど、私たちは礼拝したくなると思います。で、天の礼拝が楽しみだということになると思います。では、一旦これで終わりたいと思います。